

2) セントポーリア／アフリカスマイレ

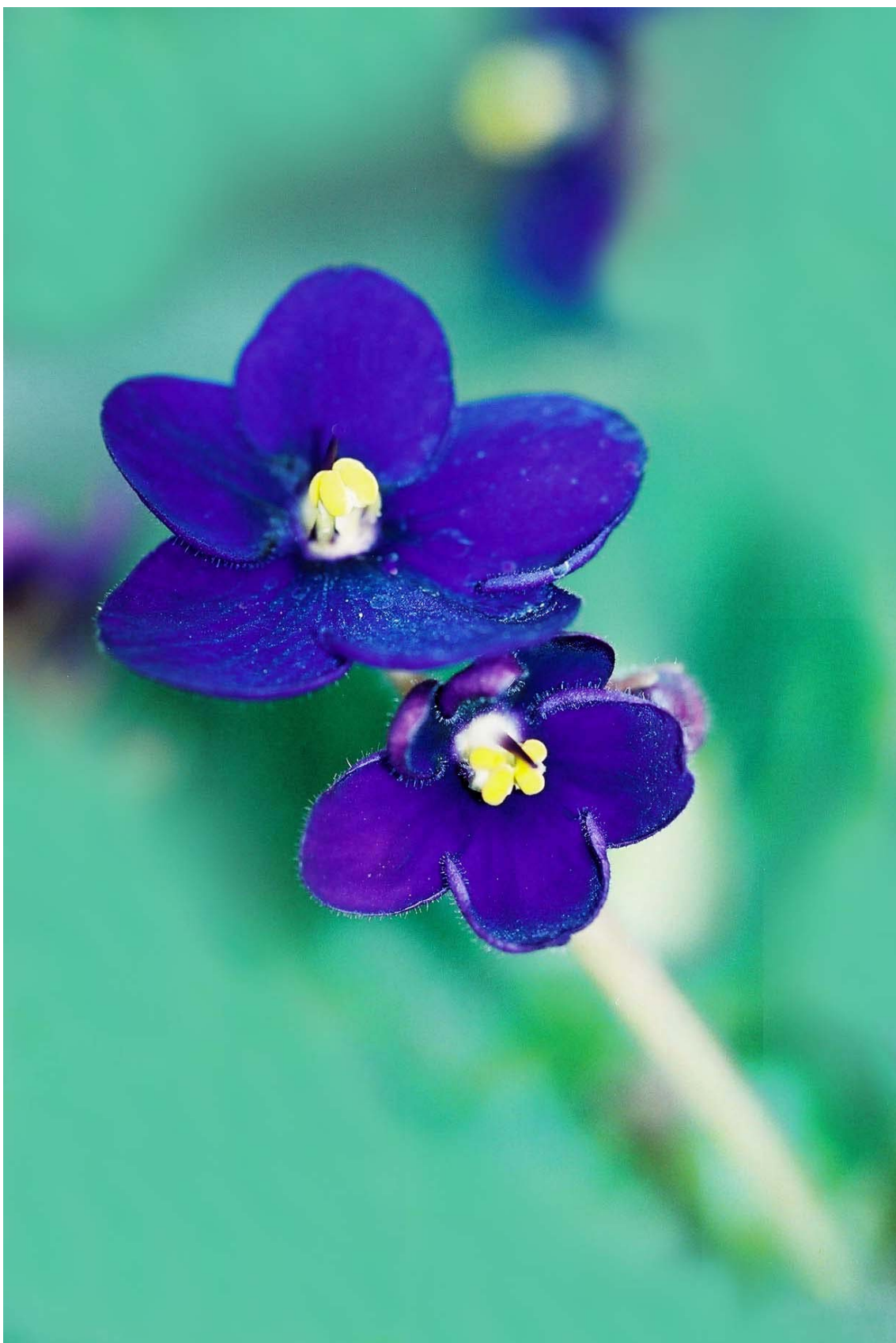
セントポーリアはイワタバコ科セントポーリア属の総称で、全世界で 20 種ほどの原種が知られている。原産地は熱帯アフリカ東部のタンザニアとケニアの一部で、花色は白、青もしくは赤紫がほとんどである。しかも 5 弁のスマイレに似た花を咲かせるところから、日本ではアフリカスマイレ(African violet)とか、発見された地名に因んで、ウサンバラスミレなどともいわれているが、スマイレとは無関係である。花色、花形、葉形、葉色などに変化が多く、アメリカやドイツで品種改良が進められ、現在ではさまざまな品種が造り出されている。強い直射日光を嫌い、気温は 18~24℃程度を好み、30℃以上の暑さにも、また 5℃以下の寒さにも弱く、湿度は 70%と人間の快適な居住環境ときわめて近いために、室内でも比較的簡単に栽培することができる。このため住宅やオフィスの高層化にともない、室内で盛んに栽培されるようになった。まさに 20 世紀の住宅文化の中で育った花ということもできよう。

セントポーリアが最初に発見されたのは 1892 年のことである。当時ドイツ領東アフリカのウサンバラ地方の総督であった、ウォルター・フォン・セントポール(Walter von Saint Paul)男爵(1825~1910 年)が、タンザニア北部のタンガ地方で発見したのが最初である。彼はゴム園やバラ園を経営する農場主でもあったが、1890 年にその種子と標本をドイツ樹林協会の会長であった父親に送った。1893 年になるとハノーバーにあった『ヘレンハウゼン王室植物園』のヘルマン・ウェンドランド(Hermann Wendland) 園長はこの種子から育った株を見て、発見者の功績を記念して『*Saintpaulia* 属』を設けて、この植物を『*Saintpaulia ionantha*』と命名した。種小辞のイオナンタとはスマイレのようなという意味である。

セントポーリアの自生地は標高 2,500m に達する高山の裾野地帯で、熱帯雨林が広がっている。この森林の中の湿った川沿いの崖地や岩の割れ目に、セントポーリアは群落を作るでもなく、それぞれがひっそりと咲き誇っている。多湿と鉄分と、それにやや酸性を帯びたこの地方の土が、セントポーリアの必須条件で、中には高山性の品種もあり、これを育てるのはかなり難しい。

1930 年頃になるとアメリカのアーマコスト・アンド・ロイストン社の研究グループが、イオナンタと同時に発見されたコンフーサを掛け合わせてブルーボーイを作出することに成功した。以来その子孫からさまざまな品種が改良され、現在では登録されているものだけで 3,000 種以上にのぼるといわれている。原種では紫系のものと、わずかに青系、白系のものがある程度だったが、園芸種ではピンク、赤、薄緑などのほかに、絞りや覆輪のものなどが作り出されている。

セントポーリアが日本に渡来したのは戦後のことで、マンシヨンブームとともに、ちょっとおしゃれ好みの階層に、圧倒的な支持を受けて瞬く間に一般化し、冬から春を代表する草花として、シクラメンとともに家々の窓辺を飾っている。



セントポーリアはアフリカスマイレともいわれるが、分類的にはスマイレとは無縁である。



セントポーリアは人間が快適とする環境を好み、暑さ、寒さ、乾燥には弱い。



発見されてから 120 年になるが、品種改良も進み、3,000 種以上が登録されている。



セントポーリアは人間と同様の環境を好むため、窓辺などでよく育つ。

[目次に戻る](#)